

第十六回教化化学研究集会研究発表要旨

法器養成を考える

井 本 学 雄

(兵庫県妙典寺住職)

現代宗教研究所主催の平成二年度「教化化学研究集会」

が大阪の雲雷寺を会場として開催されるに当り、爾前に近畿教区教化交流センター運営委員会より、私に平成二年度第二期信行道場の訓育主任を勤めた体験を通して何かを発表してほしいと要請があり、大変だと思いましたが、感じたままを話そうと覚悟を決めて出て参りました。

各聖既に御承知の通り、第二期の信行道場の入場資格者は、大学卒業者と大学三年・四年在学中で所定の階級単位修得者、又は試験検定合格者に限定されています。

二期の信行道場生は入場は八十五名でしたが、入場時から発病し、三日目にして自主退場し、結果的には八十四

名の道場生でした。年齢は八十四名中、八十名が二十歳代、四名が三十歳代で、最低年齢二十歳、最高年齢は三十九歳。平均は、二十二・八一歳でした。

◎師弟の関係は、八十四名中

師父（血縁関係を含む）六十五名

信仰上の関係で弟子入り 十九名

◎学校関係は

宗門校 七十三名

その中 立正（五十二名） 身延（二十一名）

一般校 十一名

その中 甲種（七名） 乙種（四名）

私が教務部より訓育主任の内示があった時に、私の心の中を走り抜けたものが二点ありました。

一点は、私が法器養成というような大事な訓育主任とというような重責が、果してつとめあげることが出来るだろうか、これが実感でした。私は過去に書記も主事も副

主任も経験したことがあります。それなのに、なぜ訓育主任かという点です。私は昭和二十八年の第一期の道場生です。時の主任は、岡山の妙広寺都守泰一僧正でした。各聖、御承知の通り、信仰の人であり海外布教の開教師であり、学者でもありました。私達道場生は都守僧正が遷化なさる迄、多くのものが「備前法華の集い」を主宰統括される主任先生のもとに通い、教えを乞いました。そのように溯って、訓育主任を勤められた先輩各聖を見つめて参りますと、全て素晴らしい教化力のある方ばかりです。その器でない私が、なぜ主任なのか。入場式に臨む迄、悩み考え続けました。この問題については後程、提案を致します。

二点目は、大学生を訓育することは、容易なことではないという点です。正直に申しますと、私の心の中では、近頃の大学生は生意気で信仰心もなく、どうしようもないという先入感が強くありました。訓育主任の内示があったのが三月中旬、それから七月二十一日の入場式の日まで悩み、どのようにすべきか考え続けました。入場生の前に立った時、法器養成という大任を引受けた以上、

何としても其の要請に応えなければと、決意がかたまりました。日蓮大聖人棲神の地に三十五日間籠るからには、道場生と共に修行し、率先して修行に徹して、道場生に模範を示そうと、祖廟で誓いを立てました。

この度の道場では、「日蓮大聖人に直参しよう」を合言葉として、

◎濁悪せる社会を浄化する為に、立ち向かう教師づくり
◎信頼され、尊敬される教師づくり

◎人の痛みが判る教師づくり

◎社会から必要視される教師づくり
この事に職員が一丸となって、力を合せて汗を流しました。

私は最初に、最近の大学生は生意気でどうしようもないと思っていたと申しましたが、それは、私の間違いでありました。午前四時の起床から午後九時の就寝まで、私達職員が号令をかけるのではなく、道場生同士が互いに気合を入れ合って、職員の後にピタットついて来てくれました。お蔭様で、信行道場の化主猊下や主監猊下から、今期の道場生は素晴らしいと、お賞めを頂きました。

私は素晴らしい副主任、事務長、主事、書記に巡り合い、その上、素晴らしい道場生と共に修行出来たことを本当に嬉しく思いました。

然し、そんな有難い体験の中で、幾つかの問題点があることを感じました。

一つには、出家の動機を問うても鮮明でなく、道心・発心を持っているものが殆んどないのに驚きました。例えば、「日蓮宗教師になるためには、どうしても入らなくては許証を頂けないから。師父が行ってくれというので……」、「七百遠忌で、本堂も庫裡も立派に建て直したので、これを人に渡すのがおしいと師父がいうから、それもそうだと思つて来た」。なかには、「資格を取る為だ、出来るだけ辛抱してほしいが、どうにも辛抱が出来ない時は、帰つて来いと師匠にいわれて来ました」。これには面接している職員同士で顔を見合せた程でした。

二点目は、師僧は弟子を教育しているのか、という問題です。師僧が一一文文、お経も教えていない。私達は、一一文文にお経を教えて頂く中で、僧道教育を受けたと思います。然し現代は、社会風調に同調したのか、全て

「人まかせ」「人に頼む」、これが僧道教育放棄に連らなっているように思います。師僧が教育出来ないなら、誰れが何時の時点で僧道教育をするのかという問題が出て来ます。

近畿には全国的に見ても、素晴らしい僧風林が開設されていますが、ここにも入れようとしない。得度式もせず、出家者としての自覚も植えつけず、度牒を受けに清澄に連れて行く。弟子に清澄での日蓮大聖人の話も聞かせず、教えずして、ドイツ・ネーランドを餌さにしてダマシダマシして度牒に連れて行った、と話す師僧もいるとのこと。これでは、道心や発心がないのが当り前だと思います。

宗門として、度牒交付までに沙弥校、僧風林に入ることを必須条件にすべきと思いますが如何なものでしょうか。

私は、師僧からお経を習いながら、

◎出家者は、仏飯を頂いていることを片時も忘れてはならない

◎太鼓を打って街に出よ、唱題行脚をしておれば必ず信

者は出来る

◎僧には「そろばん」は、いらぬ

このようなことを教わりながら、小さいながら発心を、少しづつふくらませたものです。豊かで便利な時代になって、師匠が弟子に向かって教えることをしなくなったのではないのでしょうか。

三点目は、二期の道場生は大学生で、然も僧階単位を取得したものばかりですが、大学で習学した教学が信行に結びついていないことに驚きました。「信行道場で、その点を理解させることこそ目的の一つであると承知しています」が、大学在学中にもう少しそのような素地を育てる事も大事だと思えて仕方ありません。同じ道場生でも、身延や池上の本山生や谷中や熊谷での学寮生等はよく訓練されている点に、これからの法器養成に何か学ぶところがあるように思います。

四点目は、法器養成は宗門の存亡に関わる重要なものですので、信行道場の職員を、宗門が長期計画の中で法器養成専門職としての職員養成をすべきである。これこそ緊急課題であります。例えば、今、布教研修生を宗門

が丸抱えで面倒を見て育成していますが、その人材の中から専門職の養成は考えられないかと思えてなりません。

五点目は、信行道場は三十五日間で二度と入場の出来ないことになっていますが、期間の延長ではなくて、修了者にアフターケアの場を与えることを考えてみてはどうだろうか。「ミニ道場」を開設すれば、大きな成果があると確信します。

以上のようなことを、道場で訓育に当たった後になって気にしています。